

新約聖書の原語についての議論

浜 島 敏[†]

— 目 次 —

序

I. セム語原典説

1. 1世紀におけるパレスチナの言語事情
2. 福音の伝播
3. ギリシア語の役割 (以上、本号 [137号])
4. セム語原典説のさまざまな証言 (以下、つづく)
5. 新約聖書の古い資料
6. 新約聖書に見られるセム語の特徴

II. ギリシア語原典説

1. ギリシア語の使用
2. 旧約聖書の引用
3. ギリシア語読者
4. 教父たちの使用言語

III. 比較

1. セム語原典説とギリシア語原典説の比較
2. 考察

IV セム語原典仮説

結語

[†] HAMAJIMA, Bin 四国学院大学名誉教授

序

旧約聖書は、アラム語で書かれている一部を除いてヘブライ語で書かれ、新約聖書は、ギリシア語で書かれたというのは、クリスチャンにとってはほぼ常識となっている。筆者自身も、『日本語聖書も「神の言葉」』（2011年）他で、そのように書いてきた。どの神学校でもヘブライ語と並んでギリシア語は必修科目となっている。しかし、どちらかというところ、ギリシア語にはかなり力を入れていても、ヘブライ語は文字が読めれば良い程度になっているところが多いのが偽らざるところではなかろうか。ところが、新約聖書も原典はむしろイエス自身が用いたとされる「ヘブライ語」ないしは、「アラム語」ではなかったかという主張が最近目立っている。もっとも、その主張にはかなりの幅があり、言語についても、ヘブライ語、アラム語、シリア語など、それぞれの主張は異なっているし、また新約聖書全体がこれらの言葉でまず書かれたというものから、全体ではなく、その一部であるというものもある。

考えてみると、聖書自身はその原語について、何も語っていない。ここでは特に新約聖書のことを述べるが、新約聖書の中に新約聖書がギリシア語で書かれたと記している個所はない。むしろ、初期の教父達の証言の中には、新約聖書も（少なくともその一部は）ヘブライ語で書かれたという証言が多い（「I.4. セム語原典のさまざまな証言」）。もちろん、イエスがそもそも宣教に用いた言語は、ギリシア語ではなく、ヘブライ語（あるいはアラム語）であったということは、ほぼ確実とされている。とすれば、その言語で記録されたという方が自然であるし、外国語であるギリシア語で書かれたと考える方がある意味でかえって不自然であるともいえる。たとえてみると、ここに新しい「日本史」の教科書ができたとする。よく見ると、江戸時代までの部分は日本語で書かれ、明治以後は英語で書かれているという不思議な日本史の教科書である。全く不自然な話であるし、見ただけで拒否反応を起こしそうである。ユダヤ人が新約聖書に拒否反応を示すのは当然のことと言える。もし、ヘブライ語で書かれていたとすれば、もっと素直に読むことができたであろうし、ユダヤ教とキリスト教の摩擦もこれほどひどくはならなかったであろう。そもそも人類救済史ということでは、通史であるはずの旧新約聖書であるが、ユダヤ人にとっては、その歴史は今もって旧約をもっ

て閉じてしまい、今なおメシア到来を期待するという形のまま停止してしまっているのは残念である。

アラム語がギリシア語に先行している考えをアラム語原典説 (Aramaic primacy) と呼ぶが、これは比較的新しい用語であり、2004年のウィキペディアによる造語である。2007年にはこれに対抗して、ギリシア語原典説 (Greek primacy) という言葉も作られた。

ギリシア語原典説をとるものは、1世紀のエルサレムはかなり国際的な都市であり、ヘレニズム化されギリシア語を日常使う者も多かったと主張する。たとえば日常語はアラム語であったとしても、新約聖書が最初に書かれたのはギリシア語であるという主張である。パウロの宣教もギリシア語地域がほとんどであり、彼らに当てられたパウロの手紙は当時共通語として用いられていたギリシア語で書かれたということである。どちらかといえば、こちらの方が一般的に認められている。本小論の趣旨は、両者の意見をまとめた上で、それらを比較検討し、筆者なりの結論を出したいということである。まずは、現時点ではあまり知られていないセム語（本稿ではヘブライ語、アラム語、シリア語などを総合してセム語と呼ぶことにする）原典説の主な主張を述べる。

I セム語原典説

1. 1世紀におけるパレスチナの言語事情

1世紀のパレスチナの言語事情は、いみじくも、イエスの十字架の罪状書きに現れている。そこには、ヘブライ語とギリシア語とラテン語が書かれていた（ヨハネ19:20）。新バビロニア王国のネブカデネザル二世によるエルサレム破壊（BCE 597-586年、歴代誌下36章参照）により、バビロンに強制連行されたユダヤ人たちは、中東全域の共通語であり、バビロンにおける日常語ともなっていたアラム語を日常語とするようになった。アラム語は、ヘブライ語と同祖のセム系言語であり、旧約聖書の一部もその言語で書かれているほどであるので、アラム語を身につけるのにそれほどの困難はなかったであろう（沖縄出身者が東京に出て、やがて東京語を身につけるようなものと考えて差し支えない）。彼らはその70年後

(捕囚がいつ始まりいつ完了したかによって、期間の設定には異なる意見がある)、バビロンを破ったペルシアのキュロス王の勅命で (BCE 538年、エズラ記1章参照、神殿落成BCE 516年)、エルサレムに帰還した後も、アラム語を話し続けることになった。歴史上の70年というのは短いようであるが、人にとってはかなり長い。一世代を30年と考えると、すでに二世から三世の時代になりかけていた。

今年は終戦後67年目であり、ほぼイスラエルの捕囚期間と一致する。戦時中朝鮮半島から日本に移り住んだ人たちの二世は母語と言わないまでも、第一言語は日本語になっているのは、われわれの周りでもよく見ることである。もっとも、400年間エジプトにいても、ユダヤ人はヘブライ語を守り続けたという意見もある。現代のチャイナタウンのように、同族が密集して生活する共同体があれば、自主性を保持することがある程度可能であったと考えられなくもない。エジプトでは、ゴシェンの地でまとまって生活をしていたので、そのような状況があったとも言える。もちろん、エジプトに下った時のヤコブ一族の言葉が、400年後エジプト脱出時のモーセの言語と同じであったという保証はない。むしろ、変化していたと考える方が自然である。

バビロンではケバル川の灌漑事業を行うために、ニップル市近くに移住させられたものが多かったというが、そればかりではなく、バビロン人と混在し、共存していた者もいたのではなかろうか。いずれにせよ、そこで生活するための日常言語としてアラム語を身につけたことは間違いないであろう。最低限、二重言語生活をしていた可能性が高い。

新約時代のイスラエルではヘブライ語は日常語としては使われなくなっていたというのが20世紀前半までの通説であったが、後半になって (特に死海写本発見以後)、アラム語と同時に (あるいは、アラム語ですらなく) ヘブライ語が日常使われていたという主張が目立ってきている (ビヴィン1997)。その場合のヘブライ語とアラム語との役割については、今なお議論の余地があるが、ユダヤ民族語としてのヘブライ語が使われ続け、同時にアラム語が中東における「国際語」として商業活動などに用いられていたと考えることは可能であろう。『オックスフォードキリスト教会辞典』の初版 (1958年) では、「ヘブライ語はBC4世紀には口語としては用いられなくなった」となっていたが、1997年版では、「ヘブライ語は、新約聖書時代にも口語・文語として使われ続けていた」と書きなおされて

いる。

ところで、ペルシアを破ったギリシアのアレクサンドロス（アレキサンダー大王、BCE 356-323年）は地中海地域を征服すると、さまざまな地域の言語なども取り込んだ一種のピジンとしての通俗ギリシア語（コイナー）を地中海全域に広めた。ギリシアの属国となったユダヤにも、ヘレニズム文化が持ち込まれ、ギリシア語が日常的にもかなり使われるようになったであろうことは予想できる。ヘブライ語やアラム語が日常使われていたところに、ギリシア語が加わったことになる。ローマ時代になっても、基本的には、この構図は変わらなかった。このようにして、ギリシア語がローマ帝国における「国際共通語」として用いられていた。もっともラビたちは、異邦人の使用するギリシア語に批判的であり、一部ではそれを禁じていたらしい。「子供にギリシア語を教えるぐらいだったら、豚肉を食べさせた方がまだましだ」（ミシュナ・ソタ9:6）という言い伝えさえあったという。「旧約聖書がギリシア語に翻訳された日は、その悪いことまさに金の子牛が作られた日に匹敵する」とも言われていた。それは、ユダヤを治めてヘレニズムを推進していたシリア・セレウコス王朝の支配から独立を宣言し、これに戦いを挑んだ「マカバイ戦争」（BCE 167年）に勝利したことにより、ユダヤ人は、エルサレム神殿奪回に成功し、ハスモン朝による独立（BCE 142年）を果たしたことの影響が大きいであろう（旧約統編マカバイ I、II 参照）。これらの発言は、そうした中で、大衆の宗教生活に大きな影響を与えるようになったファリサイ派ラビたちの主張であったと考えられる。

パレスチナがギリシアに代わって、ローマ帝国の支配下に置かれるようになってからは、ローマの国語であったラテン語を使う者もいたことであろうが、基本的にギリシアと同じ文化を持っていたローマは、ギリシア語の使用を禁止することなく、むしろギリシア語を含め、ヘレニズム文化を推し進めた。ハスモン家が終わり、政治的にはローマの傀儡政権となったヘロデ大王が即位し（BCE 37）、また宗教的にも神殿を牛耳り、ヘレニズム文化に寛容で、ローマの支配を受け入れていた富裕層からなるサドカイ派が主導権を握っている状況の中で、ユダヤのインテリ層の中にはギリシア語やラテン語を使う者がいたとしても不思議はない。イエスはギリシア語やラテン語も理解したことであろうし、時に使用したかも知れないが、基本的にはヘブライ語またはアラム語を日常会話で用い、また教えて

いたであろうと考えられている。

結局、ヘブライ語は、宗教用語として連綿と引き継がれていたのみならず、日常語としてもかなり用いられていたことになる。ほとんどのユダヤ人はヘブライ語とアラム語の二言語使用者であったとも言える。国際商業用語としては中東においては主として共通語のアラム語を用いていた一方、地中海地域では、文化・貿易面の世界語となっていたギリシア語を用いていたことになる（もちろん、地中海各地に在住していたディアスポラと呼ばれていた「離散ユダヤ人」たちは、ギリシア語を日常語としていた）。特に、大都市ではギリシア語を話す者も大勢いた。さらに役人など限られた者たちは、ラテン語をも話す多言語国家であったと考えられる。そればかりでなく、北部ガリラヤ湖周辺ではシリア語を話す者や、フェニキア沿岸ではフェニキア語、また南部地方ではアラビア語を話す者もいたという。おおざっぱに言って、これが1世紀のパレスチナ地方における複雑な言語事情であったと考えて良い。

2. 福音の伝播

(1) ユダヤ教とキリスト教の確執と分離

歴史的にはキリスト教はユダヤ教の一派として出発した。その中心的思想は、ガリラヤ出身のナザレ人のラビであるイエスこそ、聖書（旧約聖書）に預言されているメシアであるということであり、イエスのメシア性が問われていた。一般的な当時のメシア像は、いわゆる政治的な指導者として、外国の支配、具体的にはローマの支配から解放してくれる「解放者」であった。ところが、彼らの期待に反して、イエスは政治的な行動はほとんどとっていない。彼に信従する者たちは、この解放をもっと霊的なものと捉え、罪からの解放者と位置づけた。ユダヤ教徒にとっては、イエスはあくまでも「一人のラビ」、せいぜい「一人の預言者」に過ぎず、ユダヤ教の枠を超えるものではないとしたが、キリスト教徒は、イエスこそ神から遣わされた正真正銘のメシアであったとし、その「死」と「復活」を宣教の中心課題とした。そして、神から遣わされた者であることの証拠として、イエスの十字架上の「贖いの死」と「死からの復活」を伝えたのである。

最初にイエスを「メシア」と信じた者たちは「ナザレ派」(Nazoreans/Nazarenes、

使徒24:5参照)と呼ばれていた。後になってイエスがギリシア語を話すユダヤ人(ヘレニスト)や異邦人にも受け入れられるようになると、イエスはギリシア語で「キリスト」と呼ばれ、イエスをキリストと信じる者が、同じくギリシア語で「キリスト者」(使徒11:26)と呼ばれるようになった。最初にこのような呼び名が生じたのがシリアのアンティオキアである。そこではギリシア語を話す者も大勢いたが、大部分はシリア語とも呼ばれるアラム語を話す者たちであった。

70年にエルサレムが崩壊する前後に、多くのナザレ派の信徒たちはエルサレムを脱出して、ペラに移ったが、やがてペロエア(現シリアのアレッポ)、デカポリス、バシアンにナザレ派共同体ができた。これらはいずれもエルサレムから東にある地域である。ナザレ派の人たちはヘブライ語の聖書を用いており、4世紀にはヒエロニムスがペロエアまで行って、ヘブライ語マタイ伝を筆写したと証言している。

イエスの教えは弟子たちの献身的な伝道によって、少しずつユダヤ人の中に浸透していった。しかし、この時点では、まだキリスト教はユダヤ教の枠をはみ出していない。ところが、次第に異邦人信徒が増えてくると、さまざまな点でユダヤ教との間に摩擦が生じるようになる。その最初が「割礼問題」である。教会の構成員も初めはユダヤ人ないしはユダヤ教改宗者(proselyte)と言われるユダヤ教徒が中心であった。「神を畏れる人」と一般に呼ばれている異邦人信仰者(使徒10:2参照)がその中間にあって、ユダヤ人信徒と異邦人信徒の仲立ちをするクッションになっていた。ところがキリスト教の活発な宣教活動のおかげで、次第に異邦人の占める割合が増えてきた。そのことで、改宗者には要求されていた割礼を彼らにも強制するかどうかが問題になり、その問題を討議し、決着をつけたのが、49年頃に開かれたエルサレム教会会議であった。この会議で、異邦人クリスチャンたちには、割礼の重荷を課せない事が決定された(使徒15:28-28参照)。これは分離の第一歩だとはいえ、一応全員が納得する形で收拾がつけられた。

そもそも紀元前から、ユダヤ教の中にも、伝統を重んじる保守派と、ヘレニズムを受け入れギリシア化を容認するグループとがあった。いずれもトーラー(律法)を重視しつつも、トーラーの規定にないことについては、むしろ自由とし、ヘレニズムを受け入れる素地を作ったサドカイ派に対し、むしろ規定されてい

い部分については、さらに細かい解釈によって、口頭による細則を規定していったファリサイ派があった。また新約聖書には登場しないが、成員全員に対し祭司の清めを要求するエッセネ派があったが、彼らは非常に祭司的な特徴を持ち、律法が厳密に解釈され、自分たちこそ「神の聖なる真のイスラエル」であるとした。彼らはクムランで共同生活を送り、エルサレムの神殿で行われる犠牲に代わるものとして賛美を強調した。このような中から生まれたキリスト教も同じように、強いユダヤ主義をとる者とヘレニズムを容認する者が同居していた。彼らの間では、ギリシア語を話す人たち（ヘレニズム主義者）が差別を受けがちであった（使徒6:1参照）。ヘレニズム主義に立つキリスト教徒は、宗教的にはユダヤ教でありつつ、ギリシア語やギリシア文化をも受容する立場を示し、旧約聖書も七十人訳を用いていた。

初めはナザレ派も、神殿礼拝を守り、安息日に集まり、律法を順守することを怠らなかった。しかし、次第に、イエスこそが、これら書かれた律法に勝る「生きた律法（トーラー）」であるとされ、脱ユダヤ教が始まった。

使徒言行録には、ステファノの殉教（7:59-60）やパウロに対する陰謀（23:12以下）など、ユダヤ人によるさまざまな妨害が書かれているが、これらはまだ暴動の域を出ず、組織的な迫害とまではなっていなかった。サウロによる厳しいナザレ派糾弾と逮捕はあったものの、ユダヤ全土に及ぶ組織的なものではなかった。分裂とそれにとまなう迫害を強めたのは、第一次ユダヤ戦争（CE 66-73年）の頃からである。ナザレ派はこの戦いにおいて、ユダヤ支持の立場をとらなかったばかりか、エルサレム崩壊直前に、ペラに逃げ、シナゴグと教会との分裂が始まった。

70年、神殿を失い、犠牲による儀式礼拝は不可能になったユダヤ教徒たちは、シナゴグを中心としたユダヤ教の立て直しを図り、ヤブネ（ヤムニア）に学校が建てられ、いろいろな議論が重ねられ、その結果として、ヤブネ会議（100年頃）において、正典が定められ（ギリシア語七十人訳聖書は否定された）、さまざまな規定が定められると、それに合わないキリスト教徒はシナゴグから追放され、別々の道を歩むことになる。ラビも正式な任命を必要とするようになった。特に大きな問題になったのが、安息日の問題である。ナザレ派がその集会を日曜日（週の第一日）に持つようになったことである。イエスはもちろんのことパウロ

もシナゴグを中心に活動している限りにおいては、わざわざ日曜日を選んでいたとは思えず、おそらく土曜日の安息日にシナゴグを中心に活動していたものであろう。週の最初の日（日曜日）に集まるというのは、十戒の定める「安息日」（週の第七日）の規定に抵触することになるため、ユダヤ教徒には受け入れられないことであり、両者の離反を大きく方向づけたものと考えられる。教会はこれを「主の日」（Lord's Day）と呼び、「主の復活を記念する日」としたが、ユダヤ教徒にとっては、ローマの太陽神崇拜の日（dies solis=Sun-day）としか映らない。これは、ユダヤ教の根本理念に反することになり、共通の礼拝を持つことは困難になったと考えられる。もちろん新約聖書にも日曜日に集まっていたことを暗示するような表現はあるものの（ヨハネ20:26、使徒20:7、1コリント16:2など）、実際に日曜日を集会の日とした記録の最も古いのは、115年のことである。日曜日を休日と定めたのは、さらに後のことである。

そもそも、ユダヤ教徒とキリスト教徒はともに聖書（いわゆる旧約聖書）を共有していた。ところが、キリスト教徒は、この聖書にイエスの言行とその解釈を中心とした新しい文書集を加え、「聖書」（旧約）と同等の位置においた。いわゆる新約聖書である。そんなことから次第に両者の亀裂は深まった。そもそも「旧約」とか「新約」という言葉は、キリスト教徒がつけた名称であって、旧約は「古くさく」廃棄されて当然であるかのような印象を与え、あまりふさわしいとは言えない。むしろ「天啓前書」、「天啓後書」と呼び、合わせて『天啓全書』とでもして、どちらも有効な一つのまとまった文書集であると考えるべきものであろう。

両者の分裂を決定的にしたのが、第二次ユダヤ戦争（132-135年）であって、この首謀者であったバル・コクバがメシアに祭り上げられると、キリスト教徒にとっては、メシアはイエス以外にないので、それに反発し戦争にも参加しなかった。そこで敵対関係が生じ、ユダヤ教から迫害を受けるようになる。100年から150年の間に、ユダヤ教の重要な18祈祷文（The Amidah/Shemoneh Ezreh）の第12番目の祈りに、「異端者への呪い」（Birkat ha-Minim）が含まれた。「暴力行為の王国は我々の時代に速やかに破滅しますように、そして異端者はすぐに破滅しますように。彼らが命の書から消し去られ、正しい者とともに記されることがありませんように」という呪いであるが、この「異端者」の部分が「ナザレ

派と異端者は」と書かれている写本が最近カイロにあるシナゴグの倉庫から見つかっている。

ところが、キリスト教徒の拡大によって、次第に信徒が増えると、キリスト教徒の力が増し、今度はキリスト教の側から脱ユダヤ教、そして反ユダヤ教にと変わってくる。ユダヤ人は「キリスト殺し」の汚名を着せられ、380年には、アンブロシウス（335頃-397年）は、「シナゴグを焼くことは、神に喜ばれる行為である」とまで言ったと伝えられている。これは資料としては残っていないが、彼がシナゴグ焼き討ちをした司教を支持したことは確かである。これが中世、さらに近世プロテスタントに至るまで中心の思想になった。中世に何度もヨーロッパをおそった黒死病の時には、キリスト教国破壊を目指すユダヤ人の国際的陰謀であるというデマがまことしやかに伝えられ、多くのユダヤ人たちがその犠牲となった。ちょうど関東大震災の時に、「朝鮮人」に対するデマが飛んだのと似ている。シェークスピア代表作の一つ『ベニスの商人』を、我々日本人はユダヤ人シャイロックに対するいわれのない差別であり、悲劇と見がちであるが、ルネッサンス時代の一般的な考えでは、ユダヤ人いじめは当たり前の楽しいゲームですらあったことを表している。その証拠にこの作品は「喜劇」に分類されている。

(2) 東回りのキリスト教

キリスト教の西回りという言葉はしばしば耳にするが、同様に重要なはずである東回りについてはあまり語られることもなければ、書かれたこともなかった。ところが、多くの使徒たちはむしろ東に向かった。使徒たちを含む多くのイエスの弟子たちは、ローマ帝国による教会の迫害に伴い、ペルシアやメソポタミアなど東に向かった。ローマ帝国の東には、チグリス川からインドのプンジャブ地方にまでわたる勢力を持っていたパルティア王国（ペルシア）があり、この両国は常に戦争状態にあった。ところがその中間に緩衝地帯とでも言えるアルメニアやエデッサがあった（常に戦場となる危険性を持ちつつも、なんとか平和を維持することができたのであろう。現在、大国中国とインドに挟まれたブータン王国が両者の間にあって、世界で最も幸福度の高い国であると言われていることを思い起こさせる）。ローマと対立していたペルシアには、それ以前からユダヤ人の会堂が存在していたし、キリスト教には寛容であったことにもよる。使徒言行録2

章にあげられている地名、すなわちペンテコステの祭りにエルサレムに集まっていた人たちの出身地は、ローマを除いておおそ東方（小アジアを含む）である。そもそもアブラハムも東方出身者であるし、イスラエルは東方との関わりが強い。イスラエルを滅ぼしたアッシリアも、ユダを滅ぼしたバビロンも、またそのバビロンを滅ぼしたペルシアも全て東方である。バビロンでは旧約聖書の研究が進められ、メシアを待望する人たちも多くいた。イエス誕生に際してベツレヘムにまでやってきたのも同じく東方の占星術者であった。そう考えると、イスラエルは東方にこそ深い関係があったことが分かる。

さまざまな伝承があるが、アンデレは、現在のグルジア、ブルガリアに宣教し、ギリシアで殉教、バルトロマイ（ナタナエル）はアッシリアからアルメニアに行き、さらにバビロン、ペルシア、インドに下り、インドで殉教、タダイは北部シリアのエデッサ、アッシリア、ペルシア、メソポタミア全土で宣教し、ペルシアかアララテで殉教、トマスはパルテア、ペルシア、インドで宣教し、インドのマドラス近くで殉教、フィリポは東部トルコで宣教し、ヒエラポリスで殉教した、などと伝えられている（宮坂1978）。トマスについては、今日までインドのクリスチャンのあるグループは「聖トマス（マル・トマ）・クリスチャン」と呼ばれている。トマスはさらに中国や朝鮮半島にまで宣教したとさえ言われている。「達磨」がトマスのことであるという伝承もある。ローマで殉教したとされるケファ（ペトロ）ですら、トルコやアジアで宣教したと伝えられており、バビロンから手紙を書いたとも言われている（1ペトロ5:13参照）。いずれにしても、初期キリスト教会はその教会数もまた信徒数も圧倒的に東の方が多かった。このように東方に向かった「メシア教徒」たちはセム語（シリア語）の聖書を持って行った。アルメニアなどでキリスト教が国教とされた（301年）のは、コンスタンチヌスが寛容令（313年にはミラノの勅令）を出す前であったし、グルジアで国教となった（327年）のも、ローマ帝国がキリスト教を国教として受け入れる（392年）以前であった。

ポルトガル（ローマ・カトリック）が1498年にインドに入った時、マラバー海岸にそって、聖トマス教会に属している100以上の教会があるのを発見した。これら聖トマス教会は、1世紀のトマスによる宣教以来、ずっと続いていたと言われている。彼らはカトリックと異なって、聖職者は結婚を許されているし、偶像

を拝んだり、聖人に祈りをささげたり、また聖人の名を通して祈ったりもしない。また彼らは煉獄の存在を信じない。さらに重要なことは、聖トマス教会ではアンティオキアで使われていたというアラム語（シリア語）の新約聖書を今も使っているということである。

キリスト教はエジプトからエチオピアなどアフリカでも布教活動が活発に行われた。福音書記者の一人であるマルコが41年から数年にわたり、エジプトに最初に宣教したと伝えられている。その後、アレキサンドリアに住むユダヤ人から「異邦人」へと活動がおよび、アレキサンドリアのキリスト教は、ギリシア哲学の流れを汲んだ形で、キリスト教神学の中心地の一つとなった。エチオピアについては、旧約時代にまでさかのぼる古い伝承がある。

そもそもキリスト教は東方に起源を持つものであり、初期の五大キリスト教中心地を考えると、ローマを除いて、残るエルサレム、アレキサンドリア、アンティオキア、そしてコンスタンチノーブル（コンスタンチノポリス）はいずれも現在の正教会のある地域である。それらの中にはかなりヘレニズム化した大都市もあったが、文化的にはむしろ中東に属していたと言っていい。

パルティアの首都はチグリス川に面したクテシフォン（現バグダッド近郊）であった。これらの地域には多くの教会が建てられ、さまざまな名前で呼ばれていた。最初にこの東方教会の中心となったのは、エデッサであって、1世紀にキリスト教が伝えられたとされている。これらの地方にキリスト教を伝えたのは、アンティオキアのギリシア語を話すキリスト教徒ではなく、アラム語の話し手であった。216年にはアンティオキアもローマの支配下に置かれるようになったが、たとえ政治的にはローマの一部となっても、文化的、宗教的には、シリア語を話すペルシア人（ペルシア語はインド・ヨーロッパ語族であり、ペルシアの国語であったが、同時にシリア語を話す者も多数いた）との結びつきが強かった。パルティアが滅亡する225年までには、エデッサからバクトリア（北アフガニスタン）にまで、キリスト教共同体が存在していたと言われている。やがて、彼らはエデッサを追い出されると、ニシビスに移り、そこに神学校を建て、東方への宣教の中心地とした。

東方で勢力を持ったシリア教会は禁欲的性格を強く持つようになった。断食を重んじ、肉食を禁じた。ペトロは菜食主義者でパンとオリーブしか食べなかった

とか、イエスも菜食主義者であったとされた。そのような中で、アッシリアで生まれたタティアヌス（110頃—180年）は、ローマで教育を受けたのち、172年にアッシリアに戻ったが、彼はシリア語を話した。そして、彼の編集した『福音書調和』（Diatessaron）は、最初にシリア語で書かれたとされているが、現存はしていない。ただし、東方の教会では重視され翻訳もされているが、残っているのはアラビア語の写本（Cod. Vat. Arab. No. 14.）のみである。タティアヌス自身菜食主義者であり、バプテスマのヨハネの食事を「乳と蜜」にしている。人類は、ノアの時代までは菜食であったという伝説があるが、もちろん根拠はない。また肉食と菜食の対決はダニエル書1章に書かれているが、この記事は菜食を勧めるために書かれたものではない。

修道院も発達したが、アフリカで始まったような、いわゆる修行のために人里離れた場所で隠遁生活を送るための修道院ではなく、宣教師養成機関のようなものであり、ここで訓練された宣教師を地の果てにまで送り出した。後に彼らは、シリア文字を土台にしてトルキスタン、ウイグル、モンゴル語に文字を与え、キリスト教を伝えていった。これら、イスラエルからシリア、アッシリア、バビロン、ペルシアからインドに至る中東の国々で宣教活動を強めた。「東方教会」は、最も活動が盛んであった時代には、中国やモンゴルにまで（ひょっとして日本まで）伸びて、その宣教活動を行った。彼らの働きで、635年に中国に伝えられたキリスト教は、中国語では「景教」と呼ばれ、韓国や日本にも影響を与えていたと言われている。

313年にミラノの勅令を出して、キリスト教を容認したコンスタンチヌス帝は、その2年後の315年に、それまでキリスト教徒を保護してきたペルシア王に、感謝の気持ちを込めて、キリスト教徒の保護を依頼する書簡を送った。ペルシアにはローマの迫害から逃れた多くのキリスト教徒がいたからである。ところが、宿敵からのこの手紙が、当然のことながら、却って疑惑を持たれることになった。337年、コンスタンチヌスが亡くなると、ペルシアではキリスト教迫害が始まった。

（3）教理論争（異端判決）

キリスト教の統一が図られるまでは、各地の教団では、それぞれ細かいところでは違ったところがあり、指導者間で教義の食い違いもあったが、ミラノ勅令以

後は、その違いを見過ごすことはできなくなった。違いが表面化し、教理論争となり、やがて正統派争い、権力闘争へと発展することになる。最初に325年にコンスタンチヌス大帝のもとでニカイア公会議が開かれ、アレキサンドリア司教アタナシオス(295頃-373年)が率いる三位一体論が正統とされ、アンティオキアから赴任したアリウス(250/256-336年頃)の主張する子は神ではなく、子と神とは異質的であるとしたキリスト論は異端として退けられた。アリウス派は、その後、大移動を始めていたゲルマン民族のゴート族に宣教の主力を移し(ゴート人の使徒と言われるウルフィラスが聖書をゴート語に翻訳している)、ゲルマン民族からケルト民族にいたる広い地域で勢力を持ち続けた。続くエフェソ公会議(431年)では、キリスト論を巡って、アレキサンドリア学派を代表するキュリロス(376-444年)とアンティオキア学派のネストリオス(-451年)の論争があり、かなり混乱の後、ネストリオスを破門する形で決着を見た。ところが、451年のカルケドン公会議において、今度はアレキサンドリア派が決定的な打撃を受けた。ローマ帝国はすでに395年に東西に分離し、さらに西ローマ帝国がゲルマン民族の侵入を受けて弱体化(やがて467年滅亡)し、政治的にもキリスト教会においても東ローマ帝国の首都であるコンスタンチノーブルの地位が高まった。このような状況の中で開かれたのがカルケドン公会議である。アレキサンドリア司教ディオスコロス(-451/454年)が支持する単性論(キリストの神性と人性は融合したただ一つの性格を持つ)に対して、コンスタンチノーブル派が異議を唱えて、開催されたものであり、結果は、両性論(キリストは神性と人性を兼ね備えている)の前に、単性論は異端とされ、ディオスコロスの破門が決定された。神学的にはキリスト論が論点になったことになるが、政治的にはアレキサンドリア学派の地位が相対的に低くなったことを表している。アレキサンドリア教会は、カルケドン公会議において破門された結果、アレキサンドリア司教を頂点とするエジプト正教会(Egyptian Orthodox Church)、またの名をコプト(Coptic)教会として独立する道を選び、今日まで非カルケドン系として続いている。

これら三回の公会議の決定によって、「三位一体」論と「完全な神にして完全な人である」という「正統的」なキリスト論の基礎ができあがった。以後、これを認めないものは異端とされ、一種の異端を見分ける試金石とされた。

エフェソ公会議で異端とされたネストリオスの教えは、ローマ帝国では異端と

されたものの、ペルシア帝国など東方においては、むしろ中心的な思想となった。彼らは「ネストリオス／ウス派」と呼ばれ、西方からは顧みられなくなったが、最近の研究では、異端とされた理由となるような思想をネストリオスは持っておらず、アレキサンドリアのキュリロスによる策略によって、異端のレッテルを張られたものであり、むしろ「正統的」であると考えられるとする者も現れてきており、名誉を回復しつつある。手束正昭氏は、ネストリオスを異端ではなく、聖霊派運動であるとみなしている。

(4) 西方の宣教活動（反ユダヤ思想とギリシア優先化）

使徒たちの多くが、キリスト教を東方に伝えていた間、パウロたちはその新たな信仰を西方に伝えていた。シリアの首都アンティオキアからパウロは数回にわたってヨーロッパへの宣教旅行を行った。そこでは、新約聖書は当時の国際語であるギリシア語、さらに帝国の言語であったラテン語に翻訳される必要があった。時代が進むにつれ、いくつかの事件が西方におけるユダヤ人排斥運動に結びつくことになった。まず70年にローマ帝国に対してユダヤ人が暴動を起こした。続いて116年にエジプトにおいてユダヤ人反乱がおきた。また132年に起きたバル・コクバの反乱がさらにことを複雑にした。ローマ帝国では、反ユダヤ感情が高まり、愛国主義と結びついた。そこで西方の異邦人キリスト教会は、ユダヤ教やユダヤの習慣から一歩身を引くことになった。

130年に、ローマのハドリアヌス帝は、ユダヤ人にエルサレムの再建や修復を約束したが、エルサレムが「アエリア・カピトリアナ」に名称変更させられ、かつ神殿跡に「ユピテル神殿」を建てること含まれていることを知ったユダヤ人たちの怒りは頂点に達し、バル・コクバ（コホバとも言う）をリーダーとしてローマ帝国に対する戦いを開始した。反乱は成功し、各地でローマ軍を破り、ユダヤの支配権を取戻し、2年半に渡りバル・コクバは政治的指導者の座に収まり、イスラエルを統治した。ハドリアヌス帝はブリタニアから勇将ユリウス・セウェルスを召還して、ユダヤへ向かわせた。勇将の率いるローマ帝国軍の攻撃の前に、135年、エルサレムは陥落した。ハドリアヌス帝は、ユダヤがローマ帝国に反乱を続けるのは、ユダヤ教とその文化にあると考えた。ローマ人は多神教で、異教の宗教にも寛容であったが、イスラエルの宗教は他の異教文化は一切排除し、ロー

マ皇帝崇拜もちろん、どのような宗教礼拝も受け入れなかった。これがイスラエルに反乱が続く根本原因と見て取ったハドリアヌス帝は、その根絶を図った。律法書は埋められ、エルサレムの名称は「アエリア・ユピテル」とされてユダヤ人の立ち入りが禁じられた。ユダヤ暦は廃止が命ぜられ、割礼が禁止され、ユダヤ教の指導者たちは殺害された。そして「属州ユダヤ」の名を廃して、「属州シリア・パレスチナ」とした。ハドリアヌス帝は、徹底的にユダヤの宗教と文化の殲滅を目指し、ユダヤ人をこの地から追い払い、この時からユダヤ人は祖国を失い、彼らの苦難の歴史が始まるのである。

ニカイア公会議では、ユダヤ人はこの会議から締め出され、ユダヤの習慣は公的に禁止された。ギリシア語聖書がもとのセム語聖書にとって代わられた。やがて多くのセム語の書物が破壊された。コンスタンチノーブルは、ローマ帝国の首都であったが、地中海地域の共通語はギリシア語であり続けた。特にギリシアと隣り合わせるトルコ（東ローマ）は、むしろギリシア語文化圏の中心の一つとなった。西ローマでさえ、ギリシア語は重要な言語であって、貴族たちは競って自分の子弟にギリシア人の家庭教師をつけたと言うことである。7世紀になって、西ローマはようやくラテン語を採用したが、東ローマはラテン語を採用することはなかった。西方教会がラテン語聖書ウルガータを正式聖書と定めた後も、東方教会ではギリシア語聖書が重視された。それがビザンチン系写本であり、後に公認本文の元となるものである。

先に述べた数回の公会議によって、中東におけるセム族を中心とする東方教会とギリシア・ローマを中心とする西方教会の間の溝は深まることになった。ローマ帝国が東西に分裂し（395年）、ゲルマン民族などの侵入により、やがて西ローマ帝国は滅亡する（476年）が、ローマ教会は彼らに対する宣教を行い、やがて彼ら（フランク族など）がアリウス派からアタナシオス派キリスト教に転向することによって、教皇を中心としたローマ・カトリック教会の体制が出来上がっていく。それに対し、東ローマは、皇帝を頭とした国家を維持し、西のラテン化に対し、むしろギリシア化を進め、7世紀には、ギリシア語を国語と定めた（もっとも西ローマにおいても、3世紀初頭までは、礼典に用いるのはギリシア語であった）。以降の東ローマ帝国は「キリスト教化されたギリシア人のローマ帝国」とも言われている。その後も、東西のさまざまなせめぎあいがあったが、1054年に

は、相互破門という形で、決定的な分裂をきたした。

西方ローマ教会はラテン語に翻訳された聖書・ウルガータを教会の正典とし、これを独占し、一般人が聖書を持ったり、翻訳したりすることを禁じた。ルターでさえ、次のように語っている。「以前教皇権のもとでは聖書は誰にも知られていなかった。神学博士たちさえ、自身でそれを読んだことはなかった。M.ルター博士が度々語るところによると、アンドレーアス・カルルシュタト博士は神学博士になって8年後に初めて聖書を読み始めた」（ヨーハン・アウリファーバー『食卓談義』序文〔吉田正彦「聖書を読まなかった修道僧ルター」〕より引用）。プロテスタントは確かに教理の上では、ローマに抵抗（プロテスト）し、独立したわけであるが、歴史的に言うならば、西方教会の一つの分派であることには変わらない。

1453年、イスラム帝国オスマン・トルコによるコンスタンチノーブル陥落によって、東ローマ帝国が終焉を遂げ、それに伴って、西ヨーロッパに逃れたキリスト教徒たちによって、ラテン語聖書しか知らなかった西方にギリシア語聖書がもたらされた。プロテスタントは、コンスタンチノーブルからもたらされたギリシア語新約聖書を原典であるとした。それらのギリシア語写本をもとにして、1516年にギリシア語新約聖書がヨーロッパで初めて出版された。人文学者エラスムスによって出版されたギリシア語とラテン語の対訳新約聖書である。後にステファヌスなどによって改定され（1550年）、さらにエルゼヴィア（1633年）の序文の言葉から、公認本文（Textus Receptus）という名で知られるようになり、19世紀まではこれが標準的ギリシア語本文とされた。

エラスムスが初版に用いたのは、たった7つの写本であって、しかも完本はなく、黙示録の一部（22:16-21）にいたっては、ギリシア語本文が全くなく、ラテン語のウルガータからエラスムス自身がギリシア語に翻訳・創作したものである。その他にも、ウルガータによって改定している部分が数か所ある。たとえば、使徒9:6は、ギリシア語本文にないもの（「とげの付いた棒をけると、ひどい目に遭う」。彼は震えながら驚いて言った、「主よ、私に何をさせたいとお思いですか」。主は彼に言われた、「・・・」）をウルガータから翻訳付加している。これは、使徒26:14と符合させるために付加したものであろう。このような貧弱な版をもとにしてギリシア語「原典」が出版されたのである。第三版（1522年）では、有名

な「コンマ・ヨハンネウム」(Comma Johanneum)が挿入された。コンマ・ヨハンネウムとは、1ヨハネ5:7-8に見られる一節、「天において証言する者は父・みことば・聖霊の三つであり、これら三つは一つです」という部分のことである。この挿入句は、古代教会において三位一体論が確立していく過程で、聖書本文に紛れ込んだものであると考えられている。しかし、その他に、直接的に三位一体を表す聖句がなかったため、長い間聖書における三位一体論の根拠とみなされてきた。この言葉が初めてラテン語聖書にあらわれるのは4世紀に入ってからである。以降、ウルガータの普及とともにこの句が入った形で受け入れられていった。エラスムスが自ら校訂した新約聖書のためにギリシア語版をまとめた際、当初は「ギリシア語写本にはみられない」としてこの語句を入れていなかったが、後に、この語句の入ったギリシア語写本(Codex Montfortianus, 16c)を見つけ、批評版ギリシア語新約聖書の第三版以降に「疑問がある」という注をつけながらも採用した。『公認本文』の権威とともに定着したコンマ・ヨハンネウムが再び聖書本文から取り除かれることになるのは、19世紀になって批評的聖書研究が盛んになってからのことである。

もちろん、それまでローマ・カトリック教会のもとでは、翻訳（あるいは翻訳の翻訳）に過ぎないラテン語ウルガータしか知られていなかったことを考えると、どのような形であれ、ギリシア語新約聖書が西方において初めて出版されたことの意義は大きい。この公認本文が、宗教改革の聖書となり、ルターのドイツ語訳聖書や、後の英語欽定訳（ジェームズ王訳）聖書の底本になったのである。

3. ギリシア語の役割

(1) 国際語としてのギリシア語

たとえ、その原本がセム語で書かれたとしても、新約聖書がギリシア語によって、地中海世界に広まったことは明らかであるし、ギリシア語が、キリスト教を世界に述べ伝えるための道具として用いられたことも事実である。ギリシア語の役割を過小評価すべきではない。キリスト教がヨーロッパにおいてその地位を確保できたのは、やはりギリシア語聖書の果たした重要な役割とみてよい。ギリシア語（そして後のラテン語）がなかったら、世界宣教はこれほどまでに急速には

広まらなかったであろう。かといって、これで新約聖書がギリシア語で書かれたと言うことの証拠にはならない。ギリシア語は、キリスト教弁証論確立にも役立っており、そのお陰で世界宗教となることができたとも言える。

最初に書かれた言語でなくても、翻訳されて、それが世界に広まるということはしばしば起きうることであり、実際にそのような例はいくつもあろう。『千夜一夜物語』はアラビア語で書かれたものであっても、世界に広まったのは、むしろフランス語や英語訳を通してである。最初にヨーロッパに紹介されたのはフランス語訳で1704年から1717年にかけて出版されたものであり、ヨーロッパにおいて大きな反響を呼んだ。1885年から1888年にかけて英語に翻訳された「バートン版」は、今もスタンダードなものとして出版され続け、筑摩文庫の『千夜一夜物語』は、これからの翻訳である。日本語の『源氏物語』も同じように、英語を通じて世界的に認められるようになったと言われている。さらに、文字を持っていない言語の文学（主として神話・英雄譚など）は、当然のことながら別の言語で世界に知られるようになるのが普通である。アイヌの『ユーカラ』などもその一例になるであろう。その意味では、旧約聖書もギリシア語に翻訳されなかったら、世界的に知られるようにはなっていなかったかもしれない。これら一つ一つは神の知恵であり、摂理であったと言える。

(2) ギリシア語への翻訳

最初に書かれた新約聖書が、ヘブライ語などのセム語であったとしても、かなり早い時期にギリシア語に翻訳されたことも事実であろう。宗教改革時代に知られていた写本は、基本的にはコンスタンチノーブルから学者たちが西欧に持ち込んだ比較的新しい（11世紀以後）写本でしかなかった。その後、いくつかの古い写本が発見されたとはいえ、19世紀までは、ギリシア語写本は古くても4世紀にまでしか遡ることが出来なかった。その代表がシナイ写本やバチカン写本であり、少し新しい5世紀のアレキサンドリア写本である。ところが、今では2世紀、さらに一部には1世紀に書かれたのではないと言われるギリシア語新約聖書断片もいくつか存在する。特に20世紀になってアフリカから発見されたパピルス写本は、その古さが目立っている。以前から2世紀の初頭（遅くとも125年まで）に書かれたということで認められているマンチェスター大学ジョン・ライランズ図書館の

ヨハネ伝断片 (P⁵⁹) は有名である。ところが、ごく最近オックスフォード大学のモードリン・コレッジ所蔵のマタイ伝断片 (p⁶¹) が、60年にまで遡ることができ、マタイ自身の書いたものでさえありうると発表され、「イエス写本」と呼ばれ、世界に大きな反響をもたらした (d' Ancona, 1996)。ただ、これについては、かなり強い異論もあることも付しておく。パウロ書簡についても、p⁶¹が81-96年にさかのぼることができるとする意見もある。これらを考えると、たとえヘブライ語が原語であったとしても、その直後、あるいは同時進行でギリシア語訳が行われたと見る事が出来る。なお、p46に関しては、ヘブライ書がローマ書と1コリントの間 (f.28は、ローマ15:11-ヘブライ 8:8が書かれている) に位置しており、パウロ書簡の一部とされていることも興味のあることである。

(3) 新約聖書をセム語の背景から解釈する動き

新約聖書がヘブライ語でなく、そもそもギリシア語で書かれたものであったとしても、ギリシア語で書かれた新約聖書の背景には、ヘブライ文化がしっかりと折り込まれていることに異を唱えることはできないであろう。ギリシア語に隠されているヘブライ語のイディオムを、直接ヘブライ語によって知ることで、より深くイエスの言葉の原義を知ることが十分ありうることである。たとえば、誰かが *That was a bone-breaking tough work.* という表現を英語で使ったとする。その表現は英語としては不自然な表現ではあるが、英語の *backbreaking* という表現などから類推して、「骨の折れる大変な仕事であった」という日本語のイディオムが隠されていることを理解するであろう。これなどは、まだなんとか理解ができるし、ひょっとして、やがて英語のイディオムに組み込まれる可能性もないとはいえないが、**My ears are far away.* (耳が遠い) は、全く理解できないであろうし、英語になる可能性はない。また、「腹を割って話をしよう」を **Let's cut our stomach and talk.* としたり、「あの車が欲しくて、喉から手が出そうだ」を **I want that car so much that my hand seems to come out of my throat.* と言ったのでは、何の意味も通じない。このように、ギリシア語の中に潜んでいるヘブライ語に気づかないばかりに、とんでもない間違った意味になってしまうことがありうる。疲れたり、気が進まないときに「足が重い」という意味で *I have a heavy foot.* を使うと、車社会のアメリカ人に

は「暴走族」と取られるかもしれない。アクセルを踏む右足が重いことで、常にスピードを出すことになるからである。

話は変わるが、日本の『源氏物語』は、イギリス人アーサー・ウェイリーによって翻訳されたことによって、世界的に有名になった。ところが、英語で『源氏物語』を読んだイギリス人は、これを、『アラビアンナイト』と同じ世界、東洋的な不思議で神秘的な魅力を持った世界というイメージと感覚で読んでいたと聞いたことがある。我々にとっては、『源氏物語』と『アラビアンナイト』とは似ても似つかない別世界という印象を持つが、英米人にとっては、同次元に写ると言うことであろう。それと同じで、ギリシア語で新約聖書を読んだギリシア人は、ユダヤ人と全く違った世界をイメージしてしまうということになる。我々が日本語訳聖書で日本的なイエスをイメージしていないかという戒めであると同時に、ユダヤ人イエスをもっと追求して、本来の姿を知る必要があると言うことになる。もっとも、あらゆる人に福音を伝えるために、「すべてのものになった」パウロの言葉を借りれば（1コリント9:19-22参照）、日本人には日本人としてイエスを伝えるのも、あながち間違ったことではないかもしれない。それどころか、あるいはその方が日本人への宣教は進むかもしれない。プロテスタント宣教150年（カトリック宣教460年）を経ても、日本人のキリスト教徒が増えないのは、あまりにも欧米的なイエスを売り込んだ宣教師たちの失敗と言わないまでも、欧米に傾きすぎた宣教の結果であるとみることもできる。もちろん、バランスが問題であることは言うまでもない。

逆に、もとはギリシア語であったとしても、その直後、すなわち1世紀にはすでに、セム語へ翻訳されており、それが東方教会の中で、現在まで連綿と伝えられていて、ヘレニズムの影響を強く受けたギリシア・ラテン語の聖書よりも、原義を忠実に伝えているという意見もある。さらに、ヘブライ語（アラム語）による口頭ないし、メモ的な資料を想定し、それを用いてギリシア語本文を書いたという説もある。いずれにせよ、新約聖書の底に流れているヘブライの要素を掘り起こそうという考えは正当なものである。ダヴィッド・ビヴィン他による『イエスはヘブライ語を話したか』（ミルトス出版）の原題は *Understanding the Difficult Words of Jesus* となっていて、イエスの言葉の中の難解な言葉をヘブライ語やヘブライ文化によって理解しようとする試みである。

(4) ユダヤ教・ユダヤ文化による新約聖書の再解釈

原典がセム語であるか、あるいはギリシア語であるかは別としても、イエスの教えの底流にあるユダヤ思想により新約聖書を再評価しようという動きも盛んである。ウィルソンの『我らの父祖アブラハム』(Marvin R. Wilson, *Our Father Abraham, Jewish Roots of the Christian Faith*) という本は、それに気づかせてくれる。ヘレニズムとヘブライズムを対比させながら、ヘレニズム化してしまったキリスト教を見直す試みである。「恵み」か「行い」の二者択一をせまるような議論はギリシア哲学の方法であって、不毛な議論である。それらは「信仰」の表裏であって、もともと一つなのである。ユダヤ人の考えでは、それらは一体のものであって、そもそも切り離すことのできないものなのである。それを無理矢理分離しようとする、聖書の中に矛盾を見いだすことになる。ユダヤ教神学は、思想をもてあそぶヘレニズムの哲学とは異なって、行動を伴った実践を重視する。肉体と魂、そしてそれに伴う肉体は悪、魂は善というような二分法によって理解すべきものではない。これらはすべて表裏一体で不可分のものなのであるとするのが、ユダヤの思想であることを教えてくれる。

また、キリスト教はあくまでユダヤ教と共通の根を持っていることを再確認させられる。ユダヤ教とキリスト教は一本のオリーブの木であって、別々の木ではない。もともと栽培用として植えられたオリーブの木であったが、その多くの枝の中で、実を結ばない枝は切り取られ、それに代わって接ぎ木されたのがキリスト教である。たとえ、接ぎ木された枝が多くの実を実らせたとしても、それは誇るべきものではなく、むしろ接ぎ木されたものであって、元々の枝ではないのに、その枝にも栄養を送ってくれる根に感謝すべきであるという考えである(ローマ11:17-20参照)。その共通の根とは「我らの父アブラハム」であり、その根を通して神の恵みが木全体に行き渡るのである。ウィルソンは、キリスト教がどこから道を外して来たのか、さらに今後、キリスト教はどのように元の根に復帰できるのかを教えてくれる、大変示唆に富む書である。一つ教えられたことは、ユダヤ教では、トーラーが読まれるときには、会衆は起立して聞くという習慣があるということである。それは、聖書が他の本とは違う権威を持ったものであって、それを体で表現するからである。

聖書塾を主催する加藤常昭氏は、ドイツやアメリカの教会では、聖書朗読の時には、全員が起立するのを見て、礼拝の間に聖書を読むのは「間違いだということに気づいたのです」と語っておられる。神の言葉というものは、「聞く」のであって、それに徹底しなければならない。加藤氏は言葉にはしておられないが、説教中に聖書を見るのは、あたかも「説教、さらには神の言葉への冒涇である」とでも言っておられるようである。考えてみると、初代の教会にあったのは、旧約聖書だけであつたし、しかも教会（あるいは会堂）に一冊しかなく、信徒は聞く以外になかったはずである。正教会では、信徒のための椅子はなく、聖書朗読ばかりか、礼拝中立ち続ける。おそらくこれが初代教会の姿であつて、ユダヤ教から受け継いだものであつたのであろう。一般に日本のプロテスタント教会では、聖書を開いて、読みながら話を聞くのが一般的である。中には、説教の途中であっても、わざわざ聖書のページまで指示して、全員が聖書を開いたのを確認した上で朗読することすらある。確かに、あれでは説教の流れを止めてしまう。

また、この本を読んでいると、日本の考えと近いところがあり、親近感を感じることもある。日常信仰生活を旅にたとえとか、家族（一族）を大切にすること、老人を敬うこと、さらに人間関係を大切にすることなども教えられる。実はこれらはすべて、日本がかつて持っていたのに今では失われてしまったもので、それを再発見できたような気がする。日本も今は西洋化されすぎて、個人主義になって、暖かさがなくなってしまったと感じるのは、老人のひがみばかりではない。

この種の本はあまり日本語に翻訳されていないが、ケネス・ベイリー『中東文化の目で見たイエス』は、数少ない貴重な本である。中東文化の視点から、かなり大胆な見直しを行っている。彼は60年ほど中東のあちこちに生活し、40年ほど中東各地の神学校で教えた経験があり、その経験も考慮に入れた新約聖書記事の再解釈には教えられるところが多い。ベイリーは原典をセム語としてはいないが、西欧の解釈に慣れている者には、全く違った解釈の前に気絶するほどの驚きを感じる。まさに「目から鱗が落ちる」書である。

その中の一つを例に挙げると、イエス誕生について、我々が聞かされている物語は、ヨーロッパで作られた一種の「神話」であつて、聖書の記事とは違っているとしている。まず、マリアはベツレヘムに着いた夜、すべての宿屋で泊まるこ

とを拒否され、やむなく馬小屋でイエスを生み落とし、厩の中の飼葉桶に寝かせたというのが、我々の聞かされている物語であるが、まず、ヨセフたちがベツレヘムに着いたのは、少なくとも出産の数日前であろうと推測している。というのは、聖書では、彼らがベツレヘムに「滞在している間に」と書かれていて、到着した日のことであるとは考えにくいということである。

次に、マリアがイエスを出産したのはベツレヘムの家畜小屋である。（日本ではなぜか「馬小屋/厩」と理解されているが、英語ではstableであって、「畜舎」を指す一般的な語であり、「馬」小屋とは限らない。イエス誕生を描いた絵画でも、馬よりは牛や羊が描かれているものが多い。筆者も「平和の君」の誕生は軍馬を予想させる馬よりもロバや牛の方が相応しいように思う。ただし、聖書の記事では「家畜小屋」という言葉すらない。）当期中東では、ごく一般的に受け入れられていることであるが、これに新しい光を当てている。アブラハムが客人を迎えた様子（創世記18章参照）などから察しても知られるように、客人をもてなすのも中東の重要な文化の一つであって、旅人を受け入れないで放っておくことはありえないことである。イエスの教えにも「旅人に宿を貸す」（マタイ25:35他）ことは重要な義務であるとされている。ヨセフの場合も、親戚・知人を頼ってきた夫妻を受け入れないはずがない。まして妊娠中の女性を家に入れなかったら、それこそ村中の恥になることであって、そんなことはあり得ない。ヨセフとマリアはごく一般的な農家に泊めてもらったに違いない。もし、家畜小屋にでも泊められている母子を村人が見つければ、無理にでも自分の家に連れて行くであろうとしている。

ベツレヘムの当時の農家は、洞穴を利用しているものが多く、入り口を入ったところを屋内家畜舎とし、その奥を一段高くしてそこで生活した。一部屋ないし二部屋あるのが普通で、二部屋の場合には、入り口に近い方が家族の部屋、奥まった部屋が客間というのが一般的であったという。家族の部屋の畜舎側には飼葉桶が置いてあった。日本の東北地方にも、そのような家屋はあった。筆者は以前盛岡で、古い農家が保存されているのを見たことがあるが、同じような構造であって、畳ないし板の間の部屋と隣り合わせの土間には家畜を飼う場所があった。芭蕉の「蚤しらみ、馬の尿する枕元」という俳句があるが、この句を読んで、芭蕉が馬小屋に寝かせられたとは誰も考えないであろう。イエスの生まれたのもまさ

にそのような場所であったかと思われる。ヨセフとマリアを迎えようとしたその家は、たまたま「客間」が塞がってしまっていて、仕方なく家族の部屋に泊ませたのであろうという。そして、その一隅には飼葉桶が置かれていて、マリアはおそらくその飼葉桶に幼子イエスを寝かせたのであろうと書いている。昔から中東では、イエスの誕生は洞穴であったという伝承があるが、それとも合致していると書かれている。

ただ、習慣や家の構造からの説明だけでなく、言葉の上からもそれを裏付けている。聖書には「客間（カタリュー）には場所（トボス）がなかった」としか書かれていない。日本語の翻訳でも、「宿屋には部屋がなかった」と翻訳されているものがあるが、このカタリューというギリシア語は、「ホテル」を表す一般的な言葉「バンドケイオン」（良きサマリア人が怪我人を連れて行った宿屋のような）ではないことに注目している。たまたま「客間」（カタリュー）が塞がってしまっていたため、家族の部屋に泊まらせてもらったヨセフとマリアは、そこで出産し、その一隅にあった飼葉桶に幼子イエスを寝かせたのであろうと書いている。そして、中東に居住する学者達は、以前からそのように理解してきたということである。

このように新約聖書をユダヤ文化によって見直すという方法は、最近突然生まれたものではなく、古くから存在していた。特にアンティオキアを出て、エデッサ、ニシビスを経由して東方に向かったキリスト教徒がシリア語訳の聖書を携えて出て行ったということはよく知られている。しかし、彼らは「正統的」キリスト教の中心であったローマ・カトリック教会からは異端視されており（プロテスタントも西欧キリスト教に起源を持っているため、共通の基盤を持っており、基本的な思想は変わっていない）、排斥され、真剣に受け入れられることはなかった。そういうわけで、一部ではかなり古くから知られていたとはいえ、ようやくこれらが広く注目されるようになったのは、19世紀からであると言ってよい。そして、この傾向は20世紀になって特に目立っている。また、これを提唱する者は、自身が東方教会の出身者であることが多い。異端視されていた者たちが、自分たちのアイデンティティを主張し始めたためとも言えるかもしれない。また、ユダヤ教から回心したいいわゆる「メシアニック・ジュー」と言われる人たちの復権運動ともいえる。このように、異端と考えられてきた東方の教会が、最近脚光を浴び

てきているのは、決して偶然の出来事ではない。それまで見過ごされてきたり、不明であったりした部分に光が当てられ、その理解が深まったことが多く、これらの動きは注目に値する。ユダヤ人宣教に伴い、メシアニック・ジューが増加したことによって、新約聖書をヘブライ語の立場から研究する者が増えてきたということであろう。

そのほかに多くの研究書も出版されはじめている。中には、かなり独断的で、信頼に値しないと思われるものもあるが、逆に緻密な研究に基づいた重要な研究も出版されている。ブラック『福音書と使徒言行録に対するアラム語からのアプローチ』(*An Aramaic Approach to the Gospels and Acts*, 1998) が優れた研究書であるが、この初版はすでに1946年オックスフォード大学出版局から出版されている。イディオムに関する本としては、古くは、ラムサの『福音書の原語イディオムによる再検討』(*Idioms In The Bible Explained And A Key To The Original Gospels*, 1931) がある。ベナーによる最近の『生きた言葉』(*The Living Words, A Study of Hebrew Concepts from the Old and New Testaments*, 2007) とか、ロスの『ルアハ・カディム』(*RUACH QADIM: Aramaic Origins of the New Testament*, 2005) などはおもしろい。ゴードンの『ヘブライ語のイエシュアとギリシア語のイエス』(*The Hebrew Yeshua vs. the Greek Jesus*, 2006) も大変示唆に富んでいる。が、極端な意見も述べられているので、多少割引した方がよさそうな部分もある。フィッツマイヤーの『新約聖書のセム文化の背景』(*The Semitic Background of the New Testament*, 1997) は新約聖書のいくつかの引用を取り上げて、そのセム語の背景を追及している。ジョン・クライン他の『翻訳で失われたもの』(*Lost in Translation: Rediscovering the Hebrew Roots of Our Faith*, 2007) は、ヨハネ伝を除く共観福音書のすべてと使徒言行録15章35節までがまずヘブライ語で書かれて、一つの巻き物に納められ、それが「マタイ文書」と呼ばれたと主張している。しかし、その根拠は貧弱である。ザスローの『根と枝』(*Roots & Branches*, 2011) もヘブライ思想によってイエスと新約聖書を再解釈する手がかりを与えてくれる。

(つづく)

参考文献

1 辞典類

- 『キリスト教大事典』教文館、1995。
- 長窪専三『古典ユダヤ教事典』教文館、2008。
- The Oxford Dictionary of the Christian Church*, Oxford, 1997.
- Renn, D., *Expository Dictionary of Bible Words*, Hendrickson, 2005.

2 書籍

- エウセビオス（秦剛平訳）『教会史』（全二巻）山本書店、1986-87。
- エイレナイオス（小林稔訳）『異端反駁Ⅲ』（『キリスト教教父著作集 3/1』教文館、1999。
- ビヴィン、ダヴィッド他（河合一充訳）『イエスはヘブライ語を話したか』ミルトス、1999。
- ベイリー、ケネスE.（森泉弘次訳）『中東文化の目で見たイエス』教文館、2010。
- ヘルマン他（樋口進訳）『よくわかるイスラエル史』教文館、2004。
- 宮坂亀雄『使徒たちの物語』日本教会新報社、1978。
- ヨセフス（秦剛平訳）『ユダヤ古代誌』ちくま学芸文庫、2011。
- 前島誠『ナザレ派のイエス』春秋社、2001。
- Benner, Jeff A., *The Living Words, A Study of Hebrew Words and Concepts from the Old and New Testaments*, Virtualbookworm.com, 2007.
- Bivin, David, *New Light on the Difficult Words of Jesus*, En-Gedi Resource Center, 2007.
- Black, Matthew, *An Aramaic Approach to the Gospels and Acts*, Hendrickson, 1967.
- D'Ancona, Matthew, *The Jesus Papyrus*, Weidenfeld & Nicolson, 1996.
- Douglas-Klotz, Neil, *The Hidden Gospel*, Quest Books, 1999.
- Elias, Joseph, *Living Words, The Words of Christ in Aramaic-English Interlinear Edition*, Arion Press, 2002.
- Enlightenment from the Aramaic*, Yonan Codex Foundation, 1993.
- Errico, R. A., *Let there be Light*, Noohra Foundation, 2008.
- , *Aramaic Light on the Gospel of Matthew*, Noohra Foundation, 2001.
- , *Aramaic Light on the Gospels of Mark & Luke*, Noohra Foundation, 2001.

- , *Aramaic Light on the Gospel of John*, Noohra Foundation, 2002.
- , *Treasures from the Language of Jesus*, DeVorss, 1993.
- Fitzmyer, J. A., *The Semitic Background of the New Testament*, Eerdmans, 1997.
- Gibson, M. D., *The Commentaries of Isho'dad of Merv, Vols 1-3* Cambridge, 2011.
- Gordon, Nehemia, *The Hebrew Yeshua vs. the Greek Jesus, etc.*, Hilkiah Press, 2006.
- John Klein, Adam Spears, Michael Christopher, *Lost In Translation: Rediscovering the Hebrew Roots of Our Faith*, Selah Pub Group, 2007.
- Koester, Helmut, *From Jesus to the Gospels*, Fortress Press, 2007.
- Lamsa, G. M., *Idioms in the Bible Explained*, Harper One, 1985.
- , *Gospel Light*, The Aramaic Bible Society, 1999.
- Nersessian, Vrej, *The Bible in the Armenian tradition*, The J. Paul Getty Museum, 2001.
- Pick, Bernhard, *The Gospel According to the Hebrews*, Kessinger, (出版年不明).
- , *The Gospel of the Ebionites*, Kessinger, (出版年不明).
- Roth, Andrew Gabriel, *Ruach Qadim: Aramaic Origins of the New Testament*, Tushiyah Press, 2005.
- Roberts, Alexander, *Inquiry into the Original Language of St. Matthew's Gospel*, Wipf & Stock, 2009.
- Wilson, Marvin R., *Our Father Abraham, Jewish Roots of the Christian Faith*, Wm Eerdmans, 1989.
- Zaslow, R. David, *Roots and Branches*, The Wisdom Exchange, 2011.
- Greek New Testament, including: Textus Receptus, etc., Hephæstus Books, (出版年不明).

3 インターネット資料

- Aramaic New Testament (http://en.wikipedia.org/wiki/Aramaic_New_Testament).
- Aramaic_primacy (http://en.wikipedia.org/wiki/aramaic_primacy).
- Aramaic Primacy, Hebrew Primacy & Dump the Greek (<http://www.seekgod.ca/forum/showthread.php?tid=292>).
- Categories of New Testament manuscripts, (http://en.wikipedia.org/wiki/Categories_

- of_New_Testament_manuscripts).
- Comma Johanneum (http://en.wikipedia.org/wiki/Comma_Johanneum).
- Complete List of Greek NT Papyri (<http://www-user.uni-bremen.de/~wie/texte/Papyri^list.html>).
- East of the Euphrates: Early Christianity in Asia by T. V. Philip, (<http://www.religion-online.org/showchapter.asp?title=1553&C=1360>).
- Greek Primacy (http://www.enotes.com/topic/Greek_Primary).
- Hebrew Idioms in the New Testament (<http://foundationsmin.org/studies/idioms.htm>).
- List of major textual variants in the New Testament, (http://en.Wikipediaorg/wiki/List_of_major_textual_variants_in_the_New_Testament).
- The original language of the New Testament was Greek, (<http://www.sacredname movement.com/NTisGreekContents.htm>).
- Primacy and Possibility (<http://orvillejenkins.com/theology/primacyandpossibility.html>).
- Rabbinical translations of Matthew (http://en.wikipedia.org/wiki/Rabbinical_translations_of_Matthew).
- Rabbinical Jewish Versions (http://en.wikipedia.org/wiki/Rabbinical_translations_of_Matthew).
- Refutation of Peshitta Primacy (http://fontwords.com/thoughts/refutation_of_peshitta_primacy.pdf).
- The Semitic New Testament, the plot to replace the Greek New Testament (<http://watch.pair.com/peshitta.html>).
- Syriac versions of the Bible (http://en.wikipedia.org/wiki/Syriac_versions_of_the_Bible).
- Thoughts on Aramaic Primacy (<http://orvillejenkins.com/languages/aramaicprimacy.html>).